

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6.女が階段を上る時

6-1

一泊二日の越前町への小旅行から帰ってきた真紀は、11月20日月曜日の午前8時ごろに自室のベッドで目覚めると、いつものようにカーテンを開けた。

見慣れた景色を、昨夜から降り続けている雨が濡らしている。

真紀はここ数年前から、東京メトロ銀座線の銀座駅まで徒歩十分足らずの十六階建て賃貸マンションの7階にある2LDKに居住していた。

いつもは地階の駐車場に止まっているはずの愛車を、長距離の走行と海風に曝したこともあって、横田を上野のアトリエへ送った際に「呑み直さないか？」と誘われたが、咄嗟に「日曜はだめよ」とやんわり断りを言ってから、しぶしぶ降り立った男に軽くクラクションを鳴らすと、旅疲れを押して閉店間際の西麻布にある馴染みのディーラーにメンテナンスも兼ねて預けてきていた。

真紀は午前中を、無力感と得体の知れない気怠さが心の襷に纏わりついて、吐き出しようもなく溜まっている状態で過ごした。

ご多分に漏れず真紀もガラパゴス携帯電話（ガラケー）を持っていた。

梅雨明けの頃、五月末に新発売されたソフトバンクモバイル905SHに機種替えをしていた。手のひらサイズで143グラムと軽量なうえに、液晶ディスプレイが右に90度回転し横画面にもなった。また、ミニSDへの録画が可能になり、テレビ画面を見ながらメールや通話ができる。

お店では着物姿が多かったので、数寄屋袋に入れて帯に忍ばせておくこともできたけれど、携帯電話番号を知っているのは、マネージャーとチーママの他数名だったので、やむを得ない事情以外、その必要はなかった。

パソコンも、顧客の一人、大手広告代理店の幹部役員の勧めで、富士通ノートパソコンを購入して、驚くほどシンプルに運用できる顧客管理ソフトを導入した。その上、お洒落なホームページも開設することもできた。

真紀の名刺には、店の住所、フリーダイヤル、Eメールアドレス、URLが書かれていて、開店前の予約などは電話転送サービスを利用していた。

個人電話番号を聞いたがる多くの馴染み客に対し、真紀は長年培ったかわし術でサラリと受け流すことができた。

それと言うのも、一流クラブでの遊び方を心得ている客層の多くは下心に内在するプライドさえ傷つけなければ、『こはる』のママの個人電話番号をゲットすることが、限られた客同士の間で、『竹取物語』に登場する求婚者よろしく、滑稽さに軽妙洒脱な軽みを楽しむ隠語ゲーム化したりもした。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-2

元来携帯電話嫌いな横田は、余程のことがない限り持ち歩かなかった。

横田には専属契約を結んだ朝倉と言う画商がいて、仕事全般のマネジメントはほとんど任せていた。

四十代前半にして、南青山に専属アーティスト数名を抱えるギャラリーを構えるほどの辣腕画商の朝倉は、一見風采のあがらない人物のようだが、特異な審美眼と思考様式の持ち方に加え、新人のアーティストを発掘すると個々の方向性を見極め、好位置へ定着させる大胆な仕掛けを準備した。そうした外見とのギャップが幸いして、フリーランスとしての信用を押し上げるエンジンにもなった。

寡作な画家側に属する横田の制作意欲の刺激をもたらす朝倉のプロデュース力を美術業界は評価していた。

時として専属画家の個展を、経営している画廊ではなく、敢えて一流ホテルやデパートの催事場で開いて実績を上げた。

横田の画風に魅入られた朝倉は、しばしば見せる相手の感情の起伏のうねりに手を焼きながらも、硬軟取り混ぜて目論見通りの作品を生み出してきた。

朝倉はセザンヌ、ピカソ、ゴーギャン、ゴッホなど印象派やポスト印象派の画家たちのために金銭面や精神面でバックアップする傍ら、大掛かりな個展を開いて世に送り出したことで知られている美術商アンブロワーズ・ヴォラルを尊敬していた。中でもゴッホに関して言えば、彼の大ファンであった弟、テオの懸命な支援さえ悲惨な結果で終わってしまったことを見ただけでも、ヴォラルの画商としての偉業が証明される。

東京芸術大学絵画科油絵に、有名予備校でデッサンを猛勉強したにもかかわらず二年続けて受験に失敗した朝倉は、最初から私大の美術大学には行くつもりはなかったので、キッパリと方向転換した翌年に、まったく畑違いの中央大学法学部にアッサリ合格した。

卒業後民間金融機関に入社した朝倉は、新人教育の定番カリキュラムとして外回りを命じられた。

テリトリー内の訪問先に、門前仲町で倉庫を改装した斬新な画廊を経営している東京芸術大学出身の田村と言う美術商がいて、当然のことながら会話は弾むことになり、二回りの年齢差は関係なく数ヶ月後には酒を酌み交わすほどの仲になっていた。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-3

画廊を基盤に、自ら発掘して育て上げた専属契約画家の絵画展示即売会を開いたりする田村は、因習的な洋画や日本画を扱う画商とは違って、現代美術を変革するギャラリストのパイオニアだった。

半年足らずの外回りで、朝倉の生来の営業センスが実を結び始めた。

支店長からも目をかけられるようになった矢先に、朝倉は誰に相談することもなく退職届を出して、田村の下でギャラリーのスタッフとして再就職してしまった。

真紀はこれまで朝倉との面識はなかったけれど、横田の仕事場に居合わせた時にかかってきた電話の話しぶりから、マネジメントしてもらっている画商の存在をそれとなく察していた。

横田も真紀もアドレス交換をしていたが、男の気質から推して使用頻度はきわめて低かった。

越前町への行き帰りにしても、写メを撮りたくなるシーンが何カットもあったはずなのに、真紀はマナーモードに設定した携帯電話を数回チェックしただけだった。

恋に落ちた時の真紀は、持ち前の対人関係能力を発揮する。

なんと申しましても、真紀はチェーホフの『可愛い女』の主人公（オーレンカ）のような女ですから。

愛車アウディTTクーペA3のように、真紀も心と体のメンテナンスをしてもらいたかったけれど、少し熱めのシャワーを浴びて自律神経を整えた。

ささやかな企みに持っていった数枚のCDをマホガニー材で作られた収納ラックにジャンル別に戻すと、目で追いながら迷うことなく真紀は、E・H・グリーグ作曲『ピアノ協奏曲イ短調作品16』ピアノ:レオン・フライシャー、クリーヴランド管弦楽団のCDを取り出した。

真紀はピアノ協奏曲を聞きながら、パンにハムとチーズをはさんでトーストしたクロック・ムッシュを作り、ストレートティーを入れて遅い朝食を取った。

折々の曲選びは、綿密に仕分けされた塊の中から、真紀の指向性アンテナによりピックアップされた。

不釣り合いに流されている音楽を案山子のように聴いていられるほどのタフな意識を真紀は持ち合わせていなかった。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-4

銀座のシンボルと言える和光の時計塔チャイムの正時前45秒から、ウエストミンスター式チャイムが鳴りはじめた後の第一打が正午を知らせた。

ダイニングキッチンで、ノートパソコンを開いて今夜の予約状況を確認していた真紀は、複層ガラスを通してチャイムの残響と共に第一打を聞くと、いつもの癖で画像右下の時間表示を見ていた。

この界限の例に漏れず、一見さんお断りの『こはる』は、人気店がゆえに予約なしでは席の確保が容易ではなかった。

マネージャー、チーママ他、数人のホステスに専用のノートパソコンを持たせて、予約管理機能のソフトを運用してもらい、席の割り振りに伴う担当ホステスや、過去のデータを基に滞留時間の予測などを任せていた。

それでも気になる事柄があれば、開店前ミーティングで適切に対処した。

席の用意ができない予約なしの客には、信頼のおける他店へ紹介することもあるし、超VIP向けに常時数席をストックしておくことで急場をしのごうもあった。

出勤前のルーティンワークを一応に済ませた真紀は、いつものように頭を空っぽにしようとしたが、目を閉じると横田の道中で垣間見せた無彩色な表情の残像に疼きを覚えた。

水晶体で屈折した後、網膜にばら撒かれた疼きの残痕は、脳内の時間旅行でワープした若狭湾の入り江に次々に打ち寄せるや否や、鞭で叩かれた競走馬のごとく沖合に引き戻されていった。

それらは数秒で統合されると蜃気楼に似た心的情景を晩秋の若狭湾の水平線に揺らめかせた。

真紀が横田のモデルを引き受けたのは、多業種の客と接する一流クラブのママとして身につけた雑学的知識の引き出しの中から、裸婦画に関する彼女なりの見識が、相手の独自の枠組みから漏れてくる狂気に触発されたからである。

真紀の良質な引き出しから、描く男と描かれる女との相互関係を、名だたる美術館の学芸員やフリーランスのキュレーターの達見を参考に取り分けてみると、中でも夭折した貧乏絵描きたちと無報酬でモデルになった薄幸な女性たちとの、後年、日の目を見ることになる作品群に纏わる論評に、彼女は大抵ガッカリさせられてしまう。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-5

真紀自身、学術的に論じるつもりなどさらさらないが、画家の前で裸になる覚悟ができた別の要因として、マネの『オランピア』や『草上の朝食』を契機に変遷しながら十九世紀後半にヌードが芸術として社会から受容されていった流れに逆らうかのように、昨今の現代絵画に傾倒している美術評論家と称される人種の多くが、ヌードと言う明快な主題から乖離して、表現方法さえ解体されてしまったピカソやマチス以降の楽しむよりは考える裸婦画を偏重する向きに真紀は違和感を覚えていたので、横田が真紀の裸体画を描きたいと口に出したときに、ゴヤの『裸のマハ』にも比肩するほどの日本画の裸婦像を描きたいと熱く語ったことが挙げられる。

描画作業に入る前の何かの折に、真紀と横田の間でピカソの『横たわる裸婦』が話題になったことがあり、「あの作品は肖像画を静物画にしてしまっている。確かに普遍的ではあるが客観性に欠けている」と横田らしい批評を聞かされた時も、ヌードになる自分が間違っていない事に真紀は確信を深めることができた。

上野のアトリエで、完成した二点の裸婦画と対面した際に、真紀は自分が被写体であることさえ見まがうほどの造形美に名状しがたい高揚感に包まれた。

至福の時間の余韻を道ずれに、完成祝いを兼ねた越前への小旅行は、真紀にとって疎外感と心惑いを連れ帰るといふ想定外の結果になってしまった。

晩秋の月曜日に降る雨は、快適な室内環境に居ても訳もなく気が滅入る。一時過ぎに携帯電話が鳴った。横田からだった。

「昼飯はまだかな？」と横田は言った。旅疲れへのねぎらいの言葉はなかったが、その声には気遣いがうかがえた。

今の真紀には一番聞きたくない声であったし、聞きたい声でもあった。

「お疲れではないですか？」と真紀は嫌味を悟られないように自然な感じで尋ねた。

「いや。運転はあなたお任せだったし、目的も十二分に果たせたからね」

「アトリエですか？」

「ああ。……さっきまで、画商の朝倉君がいたんだ。紹介はまだだったね」

「お名前も初めてお聞きしました」と何を今更と思いながら、それでも平静を装って真紀は答えた。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-6

微妙な間を置いてから、「前に連れて行ってくれた帝国ホテルのバーで、チョイと飲みながら食事でもどうかなと思って」と横田は真紀の気持ちを押し量るように言った。

心にさざ波が立つような女のモヤモヤ感をなだめるには、お誂え向きのセッティングの提案をしてきた男の抜かりなさに、「1時間後でよろしいですか」と女は同意するしかなかった。

帝国ホテルファンの真紀は、住まいから近いせいもあって、レストランやバーを息休めに良く利用した。

なかでも、本館中2階にあるメインバーのオールドインペリアルバーは、旧帝国ホテル本館設計者のフランク・ロイド・ライトのデザインによる造作や家具や備品などが存続する唯一のスペースであり、午前11時半から24時（ラストオーダー）迄、年中無休で営業している上に、隣にあるフレンチレストランのレセゾンから一品料理を取り寄せることもできたので、より利用頻度は高かった。

愛車はまだディーラーから戻っていなかったもので、東京メトロ日比谷線銀座駅から一駅目の日比谷駅で降りて帝国ホテルに入った真紀は、1階のクロークに傘とコートを預けた。

クローク係の女は普段通りの対応をしていたが、真紀の艶美な風情に瞳が揺れていた。

すでに横田はテーブル席でジン・トニックを飲んでいた。

「お待たせしました」と儀礼的に真紀は言うてから向かいの席に座った。

顔なじみのウェイターが注文を取りに来たので、白ワインを炭酸水で割ったカクテルのスプリッツァーを頼んだ。

「仔牛肉のグリルにしたけれど、あなたは……？」と横田は空腹感を滲ませて尋ねた。

「遅い朝食を取りましたので……」と真紀は答えた。それは嘘ではなかったし、食事をする気分にもなれなかった。オールドインペリアルバーは二度目のはずなのに常連客のごとく振る舞う男が疎ましかった。

男は女の気に障る言い草に無表情を装い、押し黙ったまま、ジン・トニックを飲んだ。

壮麗にして創造性が息づく店内には、耳を澄まさないで聴き取れないほどのBGMが密やかに流れていた。

バーテンダーのシェーカーを振るリズムカルな小気味よい音のせいで平静さを取り戻した真紀は、ここを待ち合わせの場所に選んでくれた男に対して不満など思ったりしてはいけないという余裕が生じた。

「お気に召したようですね？」と真紀は微笑みながら言って話を逸らせた。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-7

初めのうちは真紀が言っていることがピンとこなかったもので、「何のこと？」と横田は怪訝そうな顔で訊いた。

「この事です」と真紀は穏やかに言った。

「もちろん……。すべてが気に入っている。教えてくれたあなたに感謝している」

横田は女がいつもの感じに戻ってくれた様子に安心して、少し大げさに言った。

スプリッツァーを一口飲んだ真紀は、無言で横田の次の言葉を待っていた。

「今度、朝倉君を紹介するよ」と横田は、しいて話の接ぎ穂を見つけて言った。

ワゴンで運ばれてきたフランス料理のクロッシュ（ドーム型カバー）が取られオンテーブルされた。

ナイフ・フォークをスマートに使いこなし美しい食べ方をする男を目の端で見ていた真紀は、「グラスの赤でもどうですか？」と台本の台詞でも読むかのように言った。

「いや、いいんだ。このバーで、このタイミングで赤ワインなど頼んだりしたら、野暮天になってしまう」と首を振って返答した横田は、ナイフ・フォークを置いて、ジン・トニックのグラスに手をやった。

「あら、おっしゃる通りでした……」と真紀はにっこりして同意する。

「あなたも何か食べたか？」と横田は自分だけが空腹を満たしていることに、ばつが悪い思いを含めて言った。

「ありがとうございます。私はこれで充分です」と真紀は微笑んで、オールドインペリアルバーのオリジナルになる突き出しの柿ピーを指さした。

「今晚、店に連れて行ってもいいかな？」

料理を食べ終わった横田は、飲み物のお変わりを注文してから言った。

「どなたを？」

「朝倉君。……画商の朝倉君」

「いちいちお聞きになるなんて、どうかなさったんですか。予約なしで来られることもある方が」と真紀はからかい半分で言う。

「うーん。朝倉君とは仕事以外では、どうもね……。弱みも握られているし」

歯切れの悪い言い方をする横田には、彼なりの理由があった。

美術市場での彼の絵画価格は一号につき八万円だったので、A4用紙サイズを描けば三十二万円で売れたのだが、派手な暮らしぶりなのに寡作画家の横田は、当然ながら生活に窮することになる。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-8

横田は朝倉から、次回作を形に前借りをしていた。号数にもよるが、何作描けば完済になるのか、懸念を抱くほどの金額だった。

ここで、生き様が横田と対照的な画家だった田中一村について記しておくことにする。

1977年（昭和52年）秋、69歳で没した日本画家の田中一村は、（昭和元年）東京美術学校（現・東京芸術大学）日本画科に入学。同期に東山魁夷がいる。

美術学校や専攻も、創作本書に登場する横田の先輩にあたることも、田中一村を記載した大まかな理由の一端である。

東京美術学校をわずか2カ月余りで中退して12年後、千葉県千葉寺町に移住。それまで描いてきた南画をやめて、独自の画風を拓こうと日展や院展に野心作を出品するが落選し続ける。

画家には医師などの支援者もいたが、中央画壇へ失望した一村は、以前から奄美大島の自然に魅かれていたこともあって、移住を決意する。

その後、没するまでの20年にも及ぶ奄美大島での画家活動は、紬工場で5年間、染色工として働き、貯えた賃金で3年間の絵画制作に傾注するという清貧生活のサイクルの中で行われた。

没後七年経って、NHK（日曜美術館）での放映や南日本新聞に連載された特集記事などにより、画家の独特なタッチと色彩感覚が日の目を見ることとなる。

代表作として、奄美時代に描かれた『アダンの海辺』や『不喰芋と蘇鐵』などが挙げられる。

清貧で孤高な生涯を送った一村が逝去した年に生まれ、奇しくも同じ学び舎から画業の道に入ることになった横田の境遇は、一村と比すると、パトロンにしても関わってきた女たちに限っても、その差異は明らかである。

二人の画才が遜色なかったとしても、横田には腕利き目利きの辣腕家のパトロンで存在価値が大きい朝倉が背後に控えている。

「どのような弱みを握られているのかしら……？お会いするのが楽しみですわ」

真紀はジン・トニックのお変わりを持ってきたバースタッフが食べ終えた食器を片づけるのを待って、色気漂う口角のあがった笑みを浮かべて言った。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-9

並木通り四丁目のKビルの三階にある『こはる』は、この界隈の一流クラブと同様に完全会員制で、営業時間は二十時から午前零時迄、土日祝日休みの体制を取っていた。

八階建てのKビルは、一階には花屋の『フラワーベッド・レイコ』があった。

オーナーの令子は、パリの有名花店で五年程修業を積んだのち当所に店舗を構えて二十年になる。フラワーベッドは英語で花壇の意味で、最初は同意語でフランス語のバルテールにしよう決めていたが、結局は分かりやすい前者に落ち着いた。

二十年と言っても、銀座では新参者と見なされる業界で、フラワーアーティスト令子として人気ブランドなどの装花も手掛けるまでになっていた。

真紀が二十八歳で『こはる』を開店した当時、『フラワーベッド』は十周年を迎える頃だった。

一回りほど年上の令子と妙に馬が合った真紀は、開店前から何かにつけて相談に乗ってもらった。

『フラワーベッド』では、花の他に蓼科高原産のジャムを販売していた。中でも特に無花果にクルミを混ぜたジャムが真紀のお気に入りだった。

『フラワーベッド』の店舗スタッフの一人ひとは、『こはる』の店内に一日ごとに生け換えられる花装飾用の花々について、営業時間帯の数時間に色感と生命力がピークになるような生け方を令子から習得していた。

生き生きとした花々の表情は、ともすればマンネリになりがちな、日々の出勤時のホステスたちの空気感にも、新たな緊張をもたらしていた。

いつもの真紀は、店のある三階まで階段を上るようにしていた。

二十段上がって踊り場、また、二十段上がり踊り場、手動のドアを開けると厨房があって、二人のコックが仕込みの準備に立ち働いていた。

着物姿で階段を上るのは、なおさら苦労だったが、一段一段を踏みしめることで、研ぎ澄まされた仕事モードに切り替えていく祈りにも似た儀式であった。

バックヤードを除き、専有面積百平米の店内は、入口に設けたクロークの脇にカウンター八席のウェィティングバーがあり、その先には全体的にゆったりとレイアウトされたボックス席があった。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-10

約束通り、横田が画商の朝倉と連れ立って『こはる』に来店したのは、明け方から降っていた雨が止んだ九時過ぎだった。

霜月も後半に入った月曜日で雨模様にもかかわらず、半分ほど席は埋まっていた。

奥まった席に通された二人のテーブルへ最初に着いた洋装でロングヘアの若いホステスは、自然体の笑顔で、「ヒデコと申します。どうぞお見知りおきください」と挨拶をしてから、二つ折りに広げた温かいおしぼりを渡し終わると、名刺を差し出ししながら、いかにも申し訳なさそうな顔で、

「ママは他のお客様のお相手をしておりますので、少々お待ちください。お飲み物はいかがいたしましょうか？」と言った。

「私はジントニック、君は……」

「ホットワインはできるかな……」と朝倉が聞くが早いか、「できるに決まってるじゃないか。つまらんことは言わないでくれよ！」と横田は急に声を荒げた。

「すまなかったね！ヒデコちゃんも好きな飲み物を頼んでね」と朝倉は謝って、横田の言い種を軽く受け流した。

ヒデコが右手を挙げると、すぐに黒服が用件を伺いに来て、ヒデコの傍らに跪いた。

黒服が立ち去ると、

「一階の花屋には何度か来たことはあるけれど、ここは初めてだね」と朝倉はふっくらとした小鼻をぴくつかせて、絵画の値踏みでもするかのように店内を見回した。

目の前にいるお客の情報知らされていたが、ヒデコはそんな素ぶりを見せないで、「私もホットワインをいただくことにしました。ありがとうございます」と言って、剣呑な雰囲気になりそうな塩梅を掬い取った。

「いいね！いいね！今度来たときは、ヒデコちゃんを指名させてもらうよ」と朝倉は弛んだ頬の筋肉を震わせて言った。

「初めて見る顔だけど……」と横田も、ヒデコに好奇心がそそられたように訊ねた。

「常勤で働かせていただいています。お客様のお顔は存じ上げております」

「常連客でもあるまいし、ホステスさんたちも、これだけいれば……、ねえ！」と朝倉は言って、ヒデコに同意を求めた。

「お二人のお席につかせていただいておりますのも、ママのお気遣いとお察しください」

ヒデコは自負心を匂わせて伝えると、席の近くのモダン花器に生けられて、しっとりと輝いている中輪の赤と白のダリアの花弁に目を向けていた。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-11

二人の男は、目の前にいる娘同然の年恰好のホステスの洗練された接遇に、年甲斐もなく自然と惹きつけられていた。

飲み物が運ばれて、グラスを合わせたところに真紀がやって来ると、そつのない挨拶をすませてからヒデコの隣に座った。

朝倉が慣習的に名刺交換の態勢をとったので、真紀が腰を浮かそうとすると、「朝倉君、野暮なことをするなよ。ここをどこだと思っているんだ」と横田は責め口調で言っ、朝倉を座るように促した。

「大変失礼いたしました。こちらから先にしなければなりませんのに」と言っ立ち上がった真紀は名刺交換をした。

直言を無視された横田は、無然とした面持ちでジントニックを口に運んだ。

真紀の神対応に気をよくした朝倉は、

「近くに、こんな素敵な店があるのを知りませんでした。横田さんも人が悪い。大事なゲストを接待する時は、使わせてもらいます」

と満更でもない言いぶりをした。

「今後ともご最良のほどよろしくお願いたします」と真紀は着物の襟もとに手を添えて科をつくり、笑みをこぼしながら言っ。

グラスに当たる氷の音を残してジントニックを飲み干した横田に、「お変わりをお持ちしましょうか」とヒデコが聞い。

「シャンパンを開けたいね。朝倉君、いいだろう？……グラスを四つ」と横田は独り決めして頼んだ。

真紀の目配せを察知したヒデコは、右手を挙げ。

高価（通り相場で十万円）なシャンパンが運ばれてくる前に、ホットワインを空けた朝倉は「スパイスのアレンジが絶妙ですね」と真紀にカクテルが気に入ったことを伝えた。

「ありがとうございます。女性バーテンダーが作るカクテルのファンが何人もいらっしゃいまして、カウンター席が埋まることもございます」

「女性バーテンダーですか！ご尊顔を拝したいですね」

「入ってくる時に、カウンターの中を見たくせに……」と横田は調子付いた朝倉に嫌味を言っ。

真紀とヒデコが顔を見合わせて微笑んでいると、シャンパンクーラーを運んでくる黒服の後から女性バーテンダーがフルーツ型シャンパングラスをトレイに乗せて来た。

月の花挽歌 ～6.女が階段を上る時～

6-12

女性バーテンダーはボトルのラベルを見せてから専用クロスで瓶口を覆って抜栓した。

コルクの栓を横田に渡した際、テイスティングは不要だと言われると、真紀、ヒデコ、朝倉、横田の順にシャンパンをグラスに手際よく注いだ。

「噂のバーテンダーです」

無駄のない一連の動作に見とれていた朝倉に、真紀はわざと勿体をつけて言った。

「菜々緒と申します」とお辞儀をして名乗るバーテンダーに向かい、「君の瞳に乾杯」と朝倉は言って、グラスを掲げた。

バーテンダーは気障で馴れ馴れしい口を利く初対面の中年男に辟易するものの、ママの手前、愛想笑いでその場をしのいだ。

「嫌われたようだね」と横田はバーテンダーの後姿を目で追いながら、薄笑いを浮かべて朝倉を冷やかした。

「先ほど言われた耳障りのいいセリフをどこかで聞いたような気がするのですが……」と記憶を辿るようにヒデコは言って、その場を取り繕おうとした。

「映画の『カサブランカ』を観たことは？」

バーテンダーに賛辞を呈するつもりで、ボギー（映画カサブランカの主演男優ハンフリー・ボガードの愛称）の名台詞を、咄嗟に思いついて口にした朝倉は、座が白けてしまった状況に後悔しているところを、ヒデコの問いを立てることで打開しようとした。

「母が沢田研二の熱烈なファンでしたので、確か、カサブランカのタイトルがついた曲を聴いたような……」とヒデコが言いかけた。

「カサブランカ・ダンディ！私が高校に入った頃にジュリーが歌った話題曲。ジュリーは沢田研二のニックネームなの。その曲のせいで半世紀以上前に封切られた映画がリバイバルされて、ボギーの格好良さに憧れた人が多かった時代でした」と真紀は言って、ヒデコの記憶を明快にした。

「さっきはボギーの名台詞を真似したんだけど、酷い猿真似になってしまった」

「やり手画商も形無しだね……。そんなに気落ちしなくてもいいよ、大抵の客は押しなべて、この店に住み着いている魔物に調子を狂わせられるんだ」

「魔物とやらも、横田画伯には取り付けないでしょう」と言って皮肉る朝倉に、「いや、実はこの私も……」と言いかけて次の言葉を呑み込んだ横田を前にして、まだ裸婦画を朝倉に見せていないことを心づいた真紀は、奇妙な感覚を覚えた。